

教養教育に関するフォーラム：外国語教育について

学長 小川 秋 實

教養教育に関するフォーラムの第3回は、平成9年2月13・14日、乗鞍高原あずみ荘において開催した。20名の教官が参加して「外国語教育について」討議した。工学部・寺沢助教と共通教育センター・Mr. Ruzicka に外国語教育の専門家の立場から話題提供していただいた。前回のフォーラムと同様に熱心な議論が行われ、実り多いフォーラムであった。その概要を報告する。

(1) 外国語教育をめぐる話題 (小川)

a. なぜ外国語教育が必要なのか？

文部省は最近、コミュニケーション能力に重点を置く英語教育の改革、それに外国語教育の多様化を提唱した。国際化への対応として当然であろう。明治初期の日本では、近代社会に遭遇したショックから、先進国の科学技術を学ぶため、漢字を含め日本語を廃止して西欧の言語を使うようにすべきだとの主張もあった。英国では公用語がフランス語であった時期もある。世界の科学技術を学ぶため外国語が必要だったし、現在は新技術開発の国際競争のためコミュニケーション手段として外国語が必要だ。

他方、外国語教育の目的は、言語とは何かを知的に考えられる人間を育て、民族と言語の関係、異文化を考えさせるためだという見解もある。

国際理解には外国語を話せるだけでは不十分で、外国人の考えを積極的に知るために意識的に努力しなければならない。帰国子女が外国で外国人の友人を造らなかつたといわれるように、日本人はこの点で努力に欠ける。

b. 外国語教育の中でなぜ英語が中心なのか？

言語の選択は国際社会が自然に行うもので、通用性の高い英語が中心になる。事実、アジアはもはや英語圏といってよいし、EUでも英語が共通語になっている。インターネットの情報は80%が英語圏から発信されているので、世界の科学・技術に遅れをとらないためには英語が不可欠だ。

他方、英語は世界数千の言語の一つに過ぎない。国際化が民族と民族が理解しあうことなら、関係の深い近隣国の言語を選ぶべきではないかとの意見もある。

c. 英語が支配的地位を占めることに問題はないか？

世界言語はその世界観を押し付けるので、文化的独自性が失われるのではないか。これに対し、スカンジナビアンは英語を話すが、文化的独自性を保持しているように、その惧れはないとの反論がある。

各種の英語が土着化している。英米語が絶対的な規範ではなく、共通語は、諸英語に共通する核の部分であろう。一方、問題は、教師の多くが英語を道具というより英米文化の一環と考えがち。教科書は英米の白人中産階級が主人公のことが多い。それを基準に外国を考え

させるので、他文化の蔑視を生む。特定の文化を背負った言語は共通語に適さないという意見もある。

ある学者は、日本は英語が氾濫し、学者の英語崇拜は病的で、英語病に罹っている。英語支配により英語が権力化し、英語を母語としないものに不利だという。これに対し別な学者は、日本は外来の物を取り入れ消化し、自分の文化の一部にすることで豊かになっている。日本人が英語を使うのは、日本語で伝わらない、例えば軽薄なニュアンスを伝えるなどのためだ。日本の英語病は杞憂に過ぎないと反論している。

昨年末からアメリカでは黒人英語を第2言語とするか否かで論争が行われた。賛成論は、標準英語への移行を助けることになる。標準英語は社会での成功に必要なだが、黒人英語は方言として存在を認めるべきだという。事実、黒人英語は音楽、芸術の分野では米社会に取り込まれている。反対論は、黒人学生の勉学能力を過小評価し、標準英語を学ばなくてもよいことを奨励することになる。人種差別にもつながる。黒人生徒は黒人英語を覚えるのを止めるべきだという。

[自由討論]

技術開発のため英語が必要というのは不適當だ。日本の技術が最高なら英語は不要ではないか。帰国子女が国際理解の努力に乏しいというのは一般論としては当たらない。

日本のなあなあで伝わる文化以外にもあることを知ることは必要だが、異文化の理解は外国語教育とは限らない。

国際的に話せる能力は必要だ。技術屋の立場では、文化を知るのには意味がない。

コミュニケーション力と外国語力は別だ。コミュニケーション力は大学以前の問題だ。

外国語教育の多様化といいながら現実はずる。短大でも2か国語やっているのに、4年制大学で英語だけというのは問題だ。今は英語中心に向かい過ぎる。第2外国語が必要だ。

科学技術の面では高校1年のレベルの英語でよい。

大学の英語では著者の意図をどう読み取るかが大切。コミュニケーションだけに偏るのはよくない。

言葉はコミュニケーションが前提。英語を学べば、英語を使えるというのは誤解。コミュニケーションには2種類あって、言葉によるものは35%、それ以外が65%を占める。だから、それほど上手でなくても意思は伝わる。ただし、細かいことは言葉を知らないと誤解の恐れがある。

技術なら英語だけで可能だろう。しかし、日本文化を英語で学んだらどういうことになるか。ロシア文化は英語だけでは無理だ。情報量と質が違う。

その国の言葉が質が深いのは分かるが、英語のツールとしてのよさを理解してもらいたい。情報のツールとして英語が必要。大学までにコミュニケーション力を付けるべきだ。フィンランドでは子どもが英語で道案内してくれた。

フィンランド人が英語を学ぶのと日本人が英語を学ぶのと違うのではないか。

フィンランド語はアジア系の言語だ。

日本では話すも馬鹿、外国では話さないと馬鹿といわれる。

外国人教師からみると日本の学生は勉強しない。私はフランス語とイタリア語を勉強したが、その経験では1つの外国語を知ると、次の外国語を知るのは易しい。

英語の支配性については楽観視している。情報化で別な言語へ変化していけよう。英語を文化に結び付ける必要はない。

そうはいつでも、英語支配で小さな国の文化は破壊される。

日本ではその心配はない。高等教育を日本語でしているから。英語で高等教育をしている国が心配だ。

フィリピンは100年前スペイン植民地だったのに、スペイン語の教育をしなかったのだろうか。アメリカに支配されてから英語教育をしたのか。教育によって言葉は変わるのか。

世界にはバイリンガルのところは多い。教育によってどちらも話せるようになる。

教育によって変わるとしたら大変なことだ。

日本の小学校で英語教育をしないのはその理由だ。まず日本語をきちっと知らなければならぬ。

英会話は年いってからは難しい。特に、聞き取り、発音ができない。日本人が英会話が下手なのは発音が身につけていないからだ。小さいときからの訓練が大切だ。

耳の問題だ。音楽をやっている人は外国語の上達が速い。インド・ヨーロッパ系の言語では母音は雑音だが、日本語ではその逆だ。リズム感覚が違う。

日本の英語の教師も発音が悪いのではないか。

私は外国人だが、日本の学生の発音は分かる。しかし、学生は自信がないのか話さない。

日本人の英語に慣れたのではないか。

話すことの自信が大切だ。完璧な発音が必要ではない。

(2) 信州大学の外国語教育の問題点（寺沢助教授・工学部）

共通教育センターでの英語教育は、学生への動機づけがうまくいっていない。その理由は、①学生は受験戦争で燃え尽き、目標を失っている。詰め込み教育で学ぶことの面白さを与えられない。②教師中心の一斉授業で、個性を認めない。多人数クラスのせいだ。③均等で優秀な人材を求めた時代背景がある。④教師が忙しい。60人クラスがまだ存在し、週6コマで、一人当たりの担当学生数が多い。その上雑用もある。⑤学生も忙しい。スケジュールが過密で、アルバイトもしているので、課題をじっくりこなす時間がない。⑥教師の動機づけが不十分。教師の間の情報交換が足りない。

多人数クラスでは、学生全員を引っ張っていけない。一人サボっても分からない。多様な習熟度の学生がいるのに、対応できない。学生は受動的授業態度になる。「分かる」と「できる」とは違い、語学では「できる」ことまで求められているが、手が回らない。

小人数クラスでは、学生が自分でやることができる。発音・聞き取り授業では、「分かる」ことは授業で、「できる」ことは自分でLLで学べる。テーマについて討論させ、興味を引き出した上で自分の意見を英語で纏めさせる。このようにしないと英語力は付かない。

今までの英文訳読は「完璧な英語がそこにあって、それを学べば英語ができる」という考えであった。しかも、入試は減点方式で完璧な英語が求められた。しかし、いろんな英語があってよい。英語で何とか相手に伝える気持ちを持てばよい。誤解さえ与えなければ多少間違ってもよい。子どもが言葉を学ぶような教育にすることだ。

教師は学生を動機付ける必要がある。テーマについて討論させることや自分で調べさせる

ことだ。発音訓練は、格好よく話したい、大学院に受かりたい、商社に入りたい、などが動機付けになる。

[質疑討論]

遅れているものに補講が必要ではないか。日本では出る杭を打つ教育、アメリカは花に水をやる教育だ。もっとも、アメリカでは落ちこぼれが多いのが問題だが。

大学院生に国際学会で発表するよう動機付けをしているが、質問されると答えられない。動機付けでどの程度うまくいくのか。

寺沢：日本では討論ということがなかった。これを長く続けたいと無理だ。まず、話す内容があることが先で、専門分野が同じなら伝わりやすい。ただし、日常英会話だけでは無理。自分で苦労して英語を纏めて発表するとうまくなる。リスニングは、5-6歳で耳が固まる。それ以降は聞き取れないというが、30歳台で毎日FENニュースを聞いて、オオム返しにカセットに吹き込んで、3ヶ月で80%聞き取れるようになった人がある。やり方次第で聞き取れるようになる。英語はリズムが大切。漢字文化は形を見て判断するが、英語は耳から聞いて覚える。学生へのアンケートでも、読み書きは得意だが、聞く話すは不得意というものが多い。しかも、小人数クラスで、話せる英語への希望が多い。

英会話をどうやって訓練すればよいか。大学院生に英語で講義したが、これから討論も英語でしようと思っている。学部で英会話をフォローする必要があるのではないか。

寺沢：授業で練習することが大切。発音がまずくてもやることだ。学生は忙しくさせないとサボる。学生にスタッフを付けるのがよい。学習環境の整備として、図書の実室、LL自習室、パソコン端末が必要。やる気を削がれてしまった教師もいるので、教師にも動機付けが必要だ。それには、教育研究環境の整備、つまり、名前を覚えられる位の小人数クラス、担当学生総数の適正化、研究時間の確保、海外研修、教師間の情報交換などが必要。

共通教育では訳読を現在もやっているのか。テキストはどのようなものか。

寺沢：環境問題などのテキストをどんどん読ませている。テキストは訳本のないものを選んでる。

予習付きの訳読なら賛成。小人数教育は一桁の学生数でないと効果がない。

LLの効果はどうか。

寺沢：マルチメディアで教育しているところがある。インターネットを使えば英語を使わざるをえない状態に追い込まれる。もっとも、教える側に使いこなせるかの問題があるが。

マルチメディアが発展すると、教養レベルの英語教師はいらなくなるのでは。

寺沢：動機付けられていけばそうだが、実際は引っ張っていく教師が必要だ。英語教授法を知っているほうが方向付けしやすい。感動を学生に与えると動機付けになるという意見もある。

専門分野では感動を与えることは大切だ。英語教育では話せることを期待している。1年終われば、英検をやることにしたらどうか。

寺沢：それも動機付けになる。目標を一寸上に置くことが必要。ハードルを少し上にして、伸びるものを伸ばすという考えもある。100人を100人とも完全にすることは無理だ。

英検をすることで、すべての英語教師に負荷を掛けるのは問題だ。

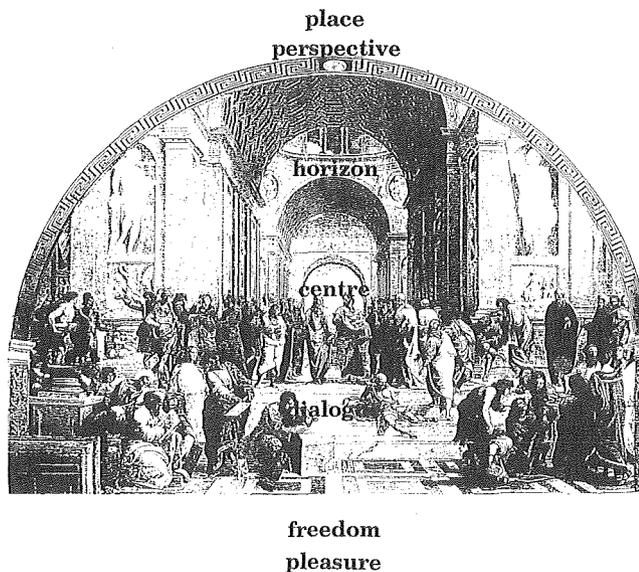
ツールである英語学習に教師を使うのはもったいない。教師はもっとレベルの高いものを

やるべきだ。

LL を使って、試験に通ればオーケーというルールがあってよい。

寺沢：学生へのアンケート結果の続きだが、夏休みにアメリカで英語を学ぶコースへの参加希望が多かった。消極的な学生は参加しない傾向。授業を外国語でやることに積極的意見も多い。ただし、内容を日本語でフォローすることの希望があった。

(3) A Comparison of Language Learning in Cambridge University and Shinshu University (Mr. D.E. Ruzicka・共通教育センター)



1. Introduction: The School of Athens

This painting by Raphael is in a sense one of the symbols of Western culture. I want to use it to try to explain what my university in England was like – how languages were taught.

BUT it is important to say that perhaps it is not good to use this well known image of Western culture, i.e. Japanese society and culture are very different to England. It's important for Japanese people that it is different, and it is probably better for Japan to continue to be different.

So the picture might be of no help in the end. But it might be useful to introduce some 'keywords'. I am going to use the painting as an analogy for the organisation or the system of a university. The painting will be a picture, a visual image of an idea.

2. Cambridge and Shindai

I have been asked to talk about how foreign languages are taught in England. Can Shindai learn something from the way that language is taught in university in England?

Some problems with this comparison.

i) In any English university, the number of students who study languages is much smaller than the number of Japanese students who study English at Shindai. So the scale of the problem is different.

ii) Students studying foreign languages always belong to a language faculty. I studied French and Italian at Cambridge University in the Faculty of Modern and Medieval Languages. There is no first year of general education. We specialize from the beginning. From the day I entered university until the day I left, I only studied languages. So the way in which I studied was much more **intensive** than in the case of the students who study English in their first year at Shindai.

iii) Another reason why the students in England can study more intensively is that they do not 'work'. Students have to study full-time.

iv) In high-school, the style of teaching and the exam system is very different. Students do not have to study so hard. There are no university entrance exams in England. But a common exam in each subject. In languages the examination includes a listening test and an oral exam in which the student has to have a conversation with the examiner. In the classroom, teachers encourage them to express themselves and to give their own personal opinions (depending on the subject of course). They often enjoy studying because they learn to study by themselves and to be independent thinkers. They are rewarded and praised for **originality**. So when they come to university they are usually very interested in the subject they have chosen. They expect to enjoy studying. They are motivated.

3. What happens at university in England?

We usually study literature in lectures or in seminars, sometimes the

number of students in a lecture could be quite large, hundreds even.

But language is usually taught in small classes of about ten students.

In a more traditional university like Cambridge, language classes are translation classes, from and into the foreign language.

Translation and Writing.

There is one class a week for each kind of translation. Each class lasts one hour. Students hand in their work two days before the class. The teacher reads and corrects the students' versions, hands them back in the class and they discuss it. The teacher can sometimes make a very good translation by using some of the best sentences written by the students.

In this sense there is a real dialogue.

These classes are usually taught in English rather than the foreign language. But essay writing in the foreign language is usually done with a native speaker in Cambridge. I was taught how to express myself in written French and Italian by French and Italian native speakers.

Speaking

We practise with a native speaker in small groups of no more than three in Cambridge, perhaps five or six in other universities in England.

More importantly there is a **language laboratory** which students can use in their free time. They teach themselves. A language laboratory gives students the opportunity to practice listening and speaking in an intensive way at their own pace. They can practice drills which are very important in becoming fluent because the basic structures become automatic. A language laboratory must be especially useful for Japanese students who have become shy and afraid to speak up in the class. They can get better practice in private in the laboratory.

In Cambridge there is a language assistant who works full-time in the laboratory. His or her job is to help students to use the machines and to help teachers who need material. Ten years ago there were consoles with satellite TV carrying channels from France, Germany, Italy, Holland and Russia. Now there are probably many more.

I once visited the Junior High School in Minowa-machi. They had a nice language laboratory. Why doesn't Shindai? Last year a student came to me from the Economics Faculty and asked me to record for him some of the listening tests from the TOEIC exam. This made me realise that there is nowhere in the University where students can find and use this kind of material.

4. Some other important points

i) In England students are not taught grammar in university. The university will usually recommend a *grammar text*. But students have to learn the grammar by themselves. They are expected to do this independently. The teachers in the language classes of course answer questions about grammar which students sometimes have when doing a translation. But the teachers' attitude is that students should work independently.

Education is '**heuristic**' (= a method of teaching that helps or allows a learner to discover and learn things for him/herself).

Students have very few classes during the week. Perhaps six or seven hours. They are expected to spend most of their time studying alone. To become good at a foreign language you have to put in a lot of time. One or two classes a week in a large group, with no other time to practice, does not make much difference.

ii) Two things which helped me to learn Italian in a year as a complete beginner.

a) **Vocabulary**. In the Italian department, the professor, who loves Aristotele, and so is very systematic, made word lists covering every possible topic. Students had to learn several hundred new words a week.

b) **Reading**. Another very respected professor told us to read 30 books in the holiday. He said read novels that are not too difficult and which have lots of dialogue. But read a lot. Three, four, five thousand pages. Japanese students spend too much time translating. They cannot read without translating. They need to stop doing this. When they begin to really read

fluently without translating they will begin to think in English. And when they can think in English, they can also speak. Students need to read a lot by themselves. The professor I mentioned used the analogy of a car. To drive you have to be able to change gear without thinking about it. In the same way, the structures of a foreign language have to be automatic, second nature. When you translate you are too conscious of how language is working. Too aware of the rules. Japanese students in high-school spend too much time looking at language through a magnifying glass. Grammar problems become very detailed. They need to stand back, speed up, relax and enjoy.

5. Another analogy: The Minefield

For Japanese students at high-school English is one of the things that their exam is made of. The exam is about finding the one perfect answer to the question. So English = the rules you need to learn to be 100 per cent correct. And so there comes the great **fear** of making mistakes.

But even native speakers are always making 'mistakes'. I make lots all the time. Students need to forget their fear. **Not perfection but communication**. I'm a native speaker and a graduate of Cambridge. But recently when a friend showed me an entrance exam from a famous university in Tokyo, there were some questions that I couldn't answer. So it's not surprising that English makes eighteen-year-old Japanese children feel nervous.

Imagine a field. Let's say that speaking English fluently is like a horse running fast and free in the field. But the Japanese student thinks the field is a minefield. High-school teachers and the exam system have buried lots of landmines in the field. So the student stands at the edge, afraid to even walk on the grass. Running is impossible. In the student's mind, running = it is very likely that I will be blown up; running = if I survive it will be a miracle

My classes are called 'conversation' classes but many of my students sit at the very back of the room. Their knowledge of English is probably quite good. But the space between them and me seems to be full of dangers.

6. Back to the Painting

Raphael's painting is a beautiful example of Renaissance space. There is a sense of solid human bodies inside a very clearly defined place. I want the painting to be an image of how I see the place in which I learned languages. Seven ideas.

i) Place

In Cambridge, the language classrooms, lecture rooms, language laboratory, library were all in the same place. The places where students are taught and where they can study by themselves are together.

**Shindai needs a place in which English is taught. Some kind of language centre which needs to combine classrooms, language laboratory, self-access study areas, and full-time technicians and advisors.

If a visitor came to the University and asked to see the English Department, where could we take him or her? There is no place where the students can come to get advice about studying either in the University or abroad.

ii) Perspective

Raphael uses the rules of perspective to create a sense of distance. Perspective means following lines into distance, to a vanishing point.

This reminds me of the idea of a **curriculum**. The word comes from the Latin for 'chariot'. Like the word 'course', it's connected to the idea of running. Imagine a chariot race. Think of Ben Hur. The parallel lines of the course run from A to B. Each track fits beside the one next to it. All the tracks go in the same direction. So in Cambridge there is a common exam -- students all do the same exam, written by one or several teachers. Past exams are published each year in a book and used in the classes for practice. Like the Japanese entrance exam system. In a race you are motivated to run

because a) there are other people running beside you; and b) you can see where the finishing line is.

iii) Horizon

In the painting, the horizon is part of the system of lines that makes the space. From the word 'horizon' we have the idea of the horizontal. The parts of the curriculum fit together in a horizontal way. The system of the curriculum is like the space of the building in the painting.

iv) Centre

The lines of the perspective go towards a centre, which is a vanishing point – a point in the distance. In the university students can understand how what they study at the beginning connects to what they will study later. They see that they are stepping up. Level one leads to level two. There are four steps and four years in the University. They are **motivated** because they know where they are going. This is because of the curriculum. The courses are straight lines leading towards a door through which they pass into the world outside the university. Students in Shindai need this kind of **structure** to feel motivated to study English. The entrance exam motivates them to enter the space of the university. But they need a sense of structure to motivate them to leave. They need to see the connection between what they study in the first year and what they will be doing in their final year.

v) Dialogue

Who are the people in the painting? Teachers. Of philosophy actually. But that doesn't matter. They are organized into a pattern. Some are isolated. (e.g. Diogenes, Michelangelo.) But most of them are talking in groups. The painting is an image of a huge conversation. So in Cambridge the teachers are a group. The students can see how each teacher's class or lesson is related to the classes of other teachers. It fits together in a pattern. The different groups are balanced one against another. In the painting the teachers talk across the space. Horizontally. Teachers need to work together to produce a common curriculum. In four years no one has ever asked me what I do in the classroom. I feel like Michelangelo. But I would rather be a

Socrates, and have students and other teachers arguing with me.

But we don't have to use an image of a Renaissance European space here. We could also think of the large tatami rooms that you find in rural areas in Japan. Remove the screens and they become wide open spaces in which people can meet and communicate. There might be more communication in tatami than in the Internet.

vi) Freedom

There is a problem here. Teachers enjoy great freedom. They will feel that if they have to work together, they might lose this freedom. Maybe. But perhaps, if they shared their teaching they might eventually have more freedom. Teachers will also feel more motivated by being able to work together. They will be like Socrates and not Michelangelo. In the painting there are people stand talking in groups or looking over someone's shoulder at what others are doing. But each person is also an individual. Freedom in a structure.

vii) Pleasure

At the moment there are three Arts students studying for a year in Exeter University in England. I sent them an e-mail message asking them to say how they thought the way they are being taught English in Exeter is different from their classes in Shindai. One of them sent me this answer:

"I didn't use to speak English in Japan, so at first I was very scared about making mistakes. But in the class in England I got used to speaking English, and at the same time I got used to making mistakes. I realized that the lessons that I enjoy most are those in which I can speak. I think it would be very nice if I could learn the pleasure of speaking in Japanese English classes.

I don't think that my speaking ability is high, but speaking is my pleasure now. This would have been

incredible in Japan. I really want to say that what surprised me most in England was the pleasure of speaking practice. I hope that this method of teaching will be used more and more in Japanese schools. I'm sure many Japanese students hesitate to speak English because of their culture. They are afraid of making mistakes. I think all they have to do is get used to speaking English, and making mistakes. If they know that making mistakes is natural, they can enjoy speaking, and they may want to study how to speak English more."

This student is lucky, because she has discovered the pleasure of communicating in a foreign language. She used to feel fear. Now she feels pleasure and enjoys her studying.

Philosophy = love of knowledge.

Aristotle in the beginning of the Metaphysics says: 'All human beings naturally desire knowledge'.

The desire to learn is natural. It should be a natural pleasure for human beings to exercise their minds. This must be the most important value of the university.

Lastly: motivation – what reasons can you give the students for learning English?

a) You can show them that it is useful. They will be able to find a job more easily? Maybe.

b) **Pleasure**. You have to show them that the pleasure of studying a language is an end in itself.

This is where a university's real freedom is – in keeping alive in any society the pleasure of learning and thinking. There is a reason why the School of Athens looks a little like a playground.

[自由討論]

ラファエロの絵はよく理解できた。信大生の国語のレベルはひどすぎる。国語を教えるべきだ。

小人数教育がよいことは分かっていることだ。問題はどうしたら実現できるかだ。

本国語が原点だ。留学生に英語で教育するのは日本が3等国になる。留学生に対しては日本語でやるべきだ。

それは、日本を占領されたコンプレックスだ。

日本人の英語学習は、ヨーロッパ人のラテン語学習に当る。多くの人にとって楽しいものではない。

外国語教育に楽しさは大切だ。

動機付けは一回だけでは駄目で、何回も必要。私の専門分野の新しいことは英語で出てくる。それを学生に伝えると学習意欲が続く。

動機付けは中学生からやるべき。日本人の英語要求は欧米人より強い。

留学生が日本に来ることの意味を考えると、日本語で教えた方がよいし、また日本語以外では現場で通用するものを伝えられない。

私はドイツ語を教えているが、大学では英語もドイツ語も駄目で壁を感じた。大学には語学教育を期待していない。学会で応答するのは高いレベルで、信大を全国一の英語教育にしない限り難しい。理系の英語は、専門書を読めればよい。読む力とコミュニケーション力とは違う。教育法については、大学とゲーテ・インスティテュートとやり方が違うので驚いた。まったく辞書を使わせない。それでドイツ語が分かった。出来てから分かることが大切だ。外国では外国語の交換教授が多い。語学は学生間の伝播力が強いので、交換教授も考えられる。

英語は自分の努力なしでは身に付かない。それを学生に強調すべきだ。

卒前学生に会社から英会話カセットが送られてくる。田舎の大学生は英語が下手といわれる。文学も大切だが、英会話技術は大切だ。信大は語学センターを考えるべきだし、高年次学生の英語教育も必要だ。

(4) 外国語教育をめぐる話題 続き (小川)

d. 日本の英語教育はこれでいいのか？

日本では、自分の意見を言うより教師の言うことを覚えることを要求される。英語で如何にコミュニケーションするかを身につけなければならない。アメリカの高校生の会話では1,000未満の単語しか使わないという。日本の高校生・大学生は1,000以上の英単語を知っているので、後はそれを使って意思表示や相手のいうことを理解する訓練をすればよい。

英字新聞読者欄に Japlish についての論争があった。“Let's concert”, “Thanks wedding Mama”などの Japlish は意味不明だ。英語は国際語だが、日本人はそれを使っていない。義務教育の英語で外国語の学習能力が失われたのだ。別な投稿者は、妙な言葉が氾濫している(A gallon of deliciousness in every drop……, など)。他の国ではこのような言葉の誤用は見られない。標準英語を使うのがそんなに難しいのか。さらにある投稿者は、TVでの英語教師の言葉は殆ど分からなかった。悪い英語をすべて直せとはいわないが、少なくとも

改善の努力をすべきだ。これに対し、Japlish は魅力的で創造的だ。日本人の外国語を学ぶ努力は大多数のアメリカ人の努力を遥かに凌ぐ。日本の若者の俗語やコマーシャルの言葉は、正統な英語と比較すべきものではなく、英語圏の俗語やコマーシャルと比較すべきだ。かっかとするべきことではない、という反論があった。

小学校から外国語教育をするのが世界の潮流のなかで、日本では16小学校で英語教育が実験的に行われている。学習の負担増になるとの反論もあるが、外国語習得は母国語でのコミュニケーション能力を補強するし、負担増よりも外国人と交流できる喜びのほうが大きいという。

ある私立大学の外国人学長は、入試から英語を外した。日本の学校での英語教育は、その後の人生で正しく英語を話すことを出来なくしている。大学で正しい教育をしたほうがよい。日本の英語教育は変えるべきだ、と主張している。

外国人が基礎日本語を22時間で学ぶ組織的方法があって成功している。(1)名詞、動詞、形容詞を別々に。ローマ字と数字。(2)文法と会話を同時に。(3)ローマ字から若干の漢字と仮名。このステップ順に学習する。日本の英語クラスは、方法も教材も組織的でないし、文法を多くやり過ぎるという。

d. 日本人の全てに英語教育は必要なのか？

英字新聞の読者の意見では、英語は国際語だが、どれだけの日本人が実際に必要なのか。滅多に話さない英語のために膨大な時間と金、努力が必要なのか。英語を学ぶには意欲が要る。必要だからではない。1年間の基礎英語の他は選択にすべきだ。さらに別な読者は、知能レベルに相応しい英語能力の獲得は簡単なことではない。意欲、能力、機会のある人に言語専門家として外国との架け橋にならせるべきだと述べている。

e. 大学における英語教育の改善策は？

大学では、小人数クラスで授業自体を英語でやるべきではないか。ネイティブスピーカーがいなくても、教師も学生も英語しか使わない授業をするなら、英語のコミュニケーション力が身に付く。ただし、日本語での授業と同じ知的内容でなければならない。これには教官の意識改革と自分の授業内容をできるだけ正しい英語で学生に理解させる努力が必要。いくつかの大学における英語での授業(日本語・日本の歴史と政治)は歓迎されている。

外国大学からの遠隔教育プログラムは、レベルが高く、費用が安いので関心が集まっている。日本にある外国大学の単位取得が可能で、日本で開講されていない授業もある。Herriot-Watt University (スコットランドに1821年創立)のキャンパス内学生数は9,000人、遠隔教育プログラムの学生は10,000人以上いる。日本の遠隔教育は他のアジア諸国より遅れている。

[自由討論]

Japlish は文法上の問題だ。

Japlish は日本人同士では通じる。しかし、人格を疑われる。

英語をたくさん読んでいれば、こういう誤りはしない。

暗号解説型でやれば、この誤りはない。学生にインターネットをやらせると、英文が読めない。文法より分量を多くやらせるべきだ。

A gallon of deliciousness in every drop は、自販機に書いてある。英語というより、デザ

イン的なものだろう。自然に英語に接するようになれば誤りは直る。

Pocari Sweat も変だ。Sweat を飲むことは考えられない。

野球言葉はカタカナ語だが英語ではない。アメリカの学術雑誌は、英語の良い悪いではなく内容で採用する。つまり、英語はツールだ。内容が良ければ英語を直してくれる。ピジン英語といわれたことがあるが、これは何か。

現地語の影響を大きく受けた、なまりのある片言英語のことだ。

「コミュニケーション」というカタカナ言葉をどうして使うのか。「伝達」では駄目か。びたっとした日本語がないからだ。

英語の選択制についてだが、嫌いなものを無理に食べさせる必要はない。

共通教育で英会話の講義が抽選になるのは、学生に意欲があるからだろう。希望者が多いに拘わらず、それに対応していないのではないか。

教官同士の横の繋がりが弱いこともあって、現状では学生の要望を全ては受け入れられない。

大学入試に英語を課さないというが、英語が能力をみるのに一番いい。

大学入試の英語がよくないということか。

現在の学生は、基本的な読み書きも出来ない。それをしっかり教えてもらいたい。会話だけに重点を置くのはまずい。

学生のレベルによる。要はやり方だと思うが、現在は教育が組織的でない。非常勤教師が多いこともある。英語教授法を学んだ教師が必要だ。新しい試みをどんどんやっていくべきだ。

医学生は、英会話ができないと駄目だ。読み書きが出来ることは当然。

小人数クラスなら、それはできる。

コミュニケーション力なら、大学では遅すぎる。

コミュニケーション力は、自分の意思を正確に相手に伝えることだ。

欧米では討論中心にやってコミュニケーション力と読み書きの力が同時に身に付く。

医療短大では、シンガポール出身の教官が英語だけで授業をやっているが、学生の評判がいい。

日本人が英語で授業することは問題だ。和製英語がはびこることになる。

教官が努力しても、悪い発音や表現などの悪影響が出る。

週1回の授業なら悪影響は出ない。

帰国子女の英語力を利用しないのはもったいない。

医学部ではスモールテーチングを英語でやっているところがある。

日本語でも難しい内容を英語でやっても無理だ。

ネイティブスピーカー以外の英語に接することは意味がある。

日本人以外と英語で話すようにするとよい。

完璧を求めるとコミュニケーション力は付かない。英語が好き人は伸びる。自分は駄目だという観念を持たせているのではないか。自分の専門のことなら、キーワード英語でも通じる。変な先入観念をもたなければ。

本物の英語に接する機会を増やすことが大切。学ぶ側の努力も要る。教える側と教えられ

る側とが学び合わなければいけない。

信大では英語教官の有機的連帯を造る必要がある。

目標が出来ているときはSUNSを使っても纏められるが、目標を造るときは直接顔を合わせなければならない。

とにかく、ノルマをこなせといわれるのは困る。

学部でノルマを持つべきなのに、講座がコマを受け持っている。

改革のときに約束事で学部毎に責任ノルマを決めた。外国語教育に一番問題が出ているが、将来は外国語教育センターのようなものを構想する必要がある。

今後このフォーラムをどのようにしたらよいか。

開催時期が悪い。関心のない人にも参加してもらおうようにすることだ。

新課程の学生が入学したあとの理科教育について論じてもらいたい。

留学生問題を取り上げるとよい。

情報教育はどうか。

共通教育への学部の取組みも話題に。

話題は共通教育にしぼるべきだ。

(6) まとめ

英語がコミュニケーションに必要という点ではほぼ一致したが、異文化理解には英語だけでは駄目だという意見もあった。大学で英語のコミュニケーション力を付けるべきだという多数意見に対し、それは大学に入る前までに付けるべきだ、英語の読解力のほうが大切だという意見もあった。

寺沢助教授からは、信大の英語教育の問題点として、学生への動機付けが不足で、この改善には小人数クラスの導入が必要なこと、大学でも学生に積極的に話させる、課題を多くやらせ学生中心の授業にするなど、やり方次第で英語のコミュニケーション力が付くことが説明された。

Mr. Ruzickaからは、英国の外国語教育のシステムは日本と違うが、学生はよく動機付けられている。日本の学生は誤りを冒すことをおそれて話さない。外国語教育のあり方をラファエロの絵を引用して説明があった後、外国語でのコミュニケーションでは、誤りを冒すことが普通で、それを怖れずに自分の考えを述べることが重要だと指摘された。

日本人教師が英語で授業することについては、賛否両論があった。

このように、意見の一致を見ない点が少なくなかったが、それぞれの発言には教育への熱意が感じられた。このような議論をさらに重ねることで共通理解に向かうと信じている。このフォーラムに参加できなかった教官からも積極的に意見を頂きたいと思う。

「参加者」

本部＝小川秋實，高須芳雄，人文学部＝宇佐美文理，佐々木寛，譲原晶子，教育学部＝干川圭吾，高橋渉，理学部＝武田三男，玉木大，医学部＝千葉茂俊，西沢理，工学部＝寺沢才紀，橋本佳男，農学部＝建石繁明，渡邊泰邦，繊維学部＝関口順一，武井隆三，共通教育センター＝D.E. Ruzicka，医療技術短大＝鈴木治郎，大平雅美。